## 1 九鬼隆一 宛岡倉覚三書

情視察のために在欧していた上司の浜尾新と合流し、 視察に基づく国政上の提言と、 権公使としてワシントンに駐在していた。 鬼隆一(号成海)宛てに出した手紙である。 ンでは伊藤博文の憲法起草に助力したシュタインを訪れ、 タインとの対談の報告が中心となっている。 もに欧米美術取調べに派遣された際、 ここに掲げるのは本校開設に先立って岡倉覚三がフェ ウィーン大学教授ローレンツ・ ウィーンからワシ 手紙の内容はヨーロッパ 九鬼は当時は駐 岡倉は、 ともにウィ すでに教育事 ント 1 意見を 米特命全 口 ・ンの九 サとと シュ 聴 1

ある。 方針を確立すべきことを提言している。 那思想に圧迫されることなく、また、 営方針の基本となったといえよう。 家の説を退け、 という確信を得、 「質を維持し、 け 大勢に遅れない範囲で一個独立の国質を磨き出さなければならな た岡 の手紙が本学史上重要な意味を持つのは、 岡倉はドイツ、 **| 倉の国粋主義的思想が明確な言葉で表明されているからで** 上記の意味における国質維持を旨とする国政の基本 独立を保っている状態を見、 九鬼に対して保守主義者の説や福沢諭吉流改良 イギリス、 フランス三国がそれぞれに独自 西洋の思想に服従せず、 この確信が東京美術学校運 日本も従来のように支 東京美術学校を性 世界 格

特の癖 に認めたものであり、 お のある、 この手紙 右下が は封筒が欠損しているが、 りの ~ 書体である。 ンで洋紙の表裏に書かれている。 横 浜市教育委員会所蔵。 明 治二十年三月二十 岡倉 独

> 過去ニ属シ 被為遊度 生モ陰ナから欣賀拝祝之至ニ堪ヘス しき感ヲナシ候 寔ニ遙察遠想ニ堪 免レス 地連日の風雪ニて華府の事思出され 上流の粹ヲ集メラレ Great Success の 思フモ察スルモ猶世ヲ隔ツルの心地被致候 一月八日附の貴墨昨夜拝 御傷の事口惜しき事と存候 一片の芳信 受信者の時は過去モ現在ニ帰スルの勢ニて常にもどか ヘス 閣下の御いたわりは此頃ハ御快復相成タル乎未タ こは必ス兩個 凡ソ水雲萬里ヲ隔てゝ通信候 披 一時あり 唯 趣 一樹 亦華府ニ異リタル事思出 令夫人モ如何被為有 々尊体御 の枝頭今ニ 是モ国光垂燿之基 発信者 |養護呉 先頃貴館ニ於テ米 御全癒 この時 は 々モ御注 時 は 候哉 無之 現 の 在 混 趣 意

當

春愁ノ一分ヲ添

でく候

玉 乎

而 異 の生スル所ナリ 7 テ デリック一世 逞クスル所以ノモ ヘニシ モ 全の仏国ニ摸擬シ 必ス他ノ二邦の制馭ヲ被ラサルヘカラス ル 人と起コリ カモ其独立ヲ全クセリ 小生は仏国より當地 其 は其国の統一ヲナス大原素ニシテ所謂 National Individuality '欧洲各国ノ特質 Character ニ付テ深感ヲ生シ候 ・ノ説 (時ノ天下ニ独乙ト申スモノモ無カリシニ タル独英佛の三 生シ | ノ頃迄は独逸ノ特質未タ定マラス 独乙ノ原語ヲ用フヘシ 始 今日世界ニハ欧羅巴ト云フモノナシ ノハ強メテ其国質ヲ鞏固ニシタルニ メテ独国固有ノ文學従つて思想モ生シ 一国アルノミ 隨テ文學モ思想モ仏国ニ = 遷リ来リ 若夫レ 此三 此 満目 一邦ノ 独乙ノ俗文ニテ傑作 一邦ハ国体民情兹ニ對持シテ ノ風物全ク相 内一モ其国質ヲ失 独逸ノ今日勢力ヲ中 壓制セラレ 此時始 上流 抑 異ナリ 因 唯タ国 ノ言 モ 玉 テ英雄と タ 独逸 ル 語 IJ 候 ハンカ 風俗 特質 ヲ 原 付 フ

多

大体 E ク (Oneness) ヲ 生シ 作 ヌ 如 1) 位 えきは最 タ 出 ル テ ナ IJ E 學問 Academy 甚 ッ シ 独 タ 思想上 ク 乙政 ル 独 事 乙固 府 玉 に於テモ 民 は モ 有 爾 1 英仏 来此 心 ノ字 中 新 政 壓制ヲ タ 非 浮 略 = + 此 V 独 主 防カント 一義ヲ は 是 文 より 実 切 パノ出 行 始 Scientific シ メ テ 版 物 独 F. ス

ヲ忘 後 負 日 テ世界ノ Turkey 風 ラ 立 鹿 ス ル 質ヲ保ツ 是迄支那 萬邦比 足氣タ 経 俗 「(千歳不変) 此 、福澤 Ŧ 衣服 ル 画 却 ル モ ル 異 ス 者 シ 論 亦 IJ 如 モ 大勢 China カラ ナ 流 肩 愚ノ 日 0 間 性質ヲ堅シ ク各国其 ノ思想ニ 日 従 本 細 大体ニ非 耶 違 ア際困 所 改良家 本ヲ支那 来ノ保守先生ハ 1 ス 末 蘇 甚シきニ ٢ あ 前 日 = の国質ヲ磨 教 Persia ナ [難ヲ生スヘシ ナ 本タ 壓セラ 玉 所 至 IJ = Individuality ル 謂 ノ特質ト ル 仕 ス 1 単ニ ユシテ鄂羅〔斯〕羅匡〔オロシャ=ロシァ〕 発服ヲ被テ巴里ノ 現 モ 世界 ル 7 非 ス 等ノ如ク外国ノ 時 ナ 所 1 テ スヤ 支那 V 世界 其精神 + ノ大勢 き出 是こそ国体維持ノ秘。。。。。。。。。。。 りのはity ヲ保チて一歩 モ 内閣 日本 国質 時勢 両立スル 1 ノ文字ヲ 今 1 1 サ 東洋首冠 白西 大勢ニ 然レ ヲ 欲 ハ果シて長遠 ノ保存ニ = 印 ス 後 変 倦 ルヘ 洋 足 是 ル れ餘 遷 用 度 クマ 一従フ 策畧ヲ Sympathy モ 馬若 カ 思 ノ盛力ヲ フ Modes 汲々 ナ 八月 テモ 隨ツ ラス ij ル 想 ・毛色ヲ ナ + 事 カクハ モ = 本内閣 テ自 IJ 1 ラ 施 1 日 誤 服 モ 訣。 策アル乎 F シ 唱 + 本 顕ハ 英 言語文章詩 = 譲ラス IJ 従 テ 然レ ス モ 異 ル ッ タラサ 国 制 ナ 存 セ ル 世 7 引クへ ノ手心ニ = ス IJ 候 (カ) セ ン カラス 圧 E 潮 ス 僧 = ラ 1 日 玉 ル ル は ル 羅 我 正 益 ス ナ 運 カ 目 本 ノ本 ŀ ラ 歌 馬 ` ル 日 = ス IJ 下 ラ 推 動 在 カ 管弦 丰 個 叱 モ 字 ハ 本 進 別 4 1 ス 移 ラ 独 馬 玉 ラ

> シ 急 = 追 F の御見込い れ て前 途 百 如 年 定 畧 Ė 乎 是迄 0 様子 実 危 5 É 事

洋 堅 = 均 務 外 シ 二平 で 此 固 人 玉 = 日 節 = ナ 基 在 = 早々木綿 本急進家 濱尾氏 ル 模倣 軽 均 ナ IJ IJ 蔑セ = 因テ 價 第三ニ ス 格ヲ 1 ラ 凡ソ ル ハ世界 影響 洋服 共 ル = 有ス 物 は国 因 = 當 根 ラ被 同 セ ル 1 ラル 大勢 地 源 ル シき時は必ス上下ノ差等ヲ 際 = 非 0 カ 1 ル 事ヲ 関係ニては各国 自然ナリ ス ス = 御 モ 後 高説 ノナ 第一 主 ル 張候 ン 事 IJ 其 伺 ヲ 第 兵力 恐 0 一、共 ヒ 門 度 日 n 兵 候 本 固 ノ強弱ニ 国 加 力 有 家 早 B テ ク 強弱 西 生 所あルこそ同等平 強 耶 毎 洋 ス あ 弱 蘇 夜 は 玉 特二 長 似 異 体 弟子入ヲ ノナル 第二 談 ノ維 セ 玉 質 其 E 西 + 財

之 分 昨 面 日本ニ 夜 白 の話 7 候 7 學者的 稱 ス ル よリ 程 鬼神 カ 寧 タイ = П 政 ハ ナ 治 翁 ク 家 候 的 共 話 ヲ 中 = 々 7 横着ナル 英 雄 肌 の奇 老狸 論 -モ 有 隨

手ヲ 建設印 船 欧洲 = 14 用意ヲ 乗シて東洋ヲ吞マ 問 は 数到底 露 独 出 題ヲ 欧羅巴 は直 兼 騒 Z 兼 五六 切 ナ 動 棄 チ タ 同 サ テ 艦ニ 盟 軍 此 東洋 タ 騒亂 艦十 先確 は砲臺と此 ス ル ル 過きサ ル 政畧ニ着手スへ ハ は 則 事 個 カ カニ 日 プラス } 是 ニの葛 ヲ 本ノ 作 ス ナ ル IJ 上十 故 ル 年© 藤 治 独 事 用 安ナ ナ 消 艦あれ 玉 英仏露皆 IJ 意ト カ ス は獨リ其海軍ノ発 シ IJ ル 是 欧洲對 ハ英仏露各 ル 片 は外敵 再ヒ 第 ~ 目 中 東 シ 下葛 原ノ 洋 窺 = 拾 此間 八恐 海岸防 上學 政 藤 陰 畧 **今** マ東 0 霧 ル 白 ク = 禦則 達 IJ 洋 日 タ 足 東洋ニ き證 本ニ於テ十 同 Ł ナ ラス 動 国等 散 3 朝 カ (1)據 ス 為 は十 ス 砲 カ V メ 好 へき 臺 IJ は 分 機 分 英

焦急ヲ知リて政府ト共ニ国家ヲ守ルノ精神ヲ起サセサルヘカラス云 欧洲 洲 ナリ 此際ニ在テ日本ノ大使モ公使モ一人モ欧洲ニナき事ハ何事ソハ之ニ賓待スル事恰カモ帝王ニ對スル如シ 外の皇族ニはナサヌ事 Ŀ. 此 ノ内閣ハ外国事情 ヲ得ヘシ ニニ決ス は容易ニ ニ至ラス (此辺耳痛シ) ノ大勢ヲ毎日記載シて日本ニ送らせ 故ニ中 独墺共ニ日 他 故ニ最モ安心シて同盟スルヲ得ヘシ 国 ノ手出シハ成ラス - 原ニ日本ノ公使ナき事ハ拙き事ナラスヤ ニ明カナラス 日本ノ外交政畧ハ其半ハ東洋ニ 本ニ 一同盟 故ニー 貴きヲ知りて日 最モ安心シて内治ノ改良ヲナ 個俊才ヲ自分ノ門ニ派シて 日本ノ人民モ能ク目下ノ 本皇族ノ来欧 一決シ 且. 同盟シタ 其半ハ欧 亦日本 パノ時 ル 以

ト存候 如 0 ク兼て閣下の高按ニモ有之 少々 事モ ク 在欧日本大使若クハ公使の重任タル事ハスタイン 候へハ 音楽モ精良ナリ クドき様ニ候へ共愚感ヲ展へ候ノミ 以上餘リ失敬 墺国御駐紮の事可然ト存候 ナル 美術モ左程悪シからす 事 若閣下カ御帰朝之上萬萬一再タヒ外出 御 | 叱正奉仰 候 是ハ新ラシき話ニモ無之 且又當地ハ美人モ山 9候間 翁の云フ迄 外よりは宜敷 モナ

云

此後二週間後ニ羅馬ニ可参候 小生全ク無事ニ候 御休神被下度

在

維

納府

天心生拝

乱筆拝

謝

草々頓首

三月二十一日

成海公閣下

/ヱノルサハ今ニ巴里有之 病氣少シは宜敷方ニ候 Henry

Adams ス、 バン 氏 御 ク 逢 口 Ł 候 フ 1 ハ 、 君 モ 口 宜. 敷奉 様 願 回 々 候 111 スポツジ君ハ如何

候

哉

## ② 岡倉覚三の美育の提唱

て貴重であると思われるので、 かっ 社 が、 夫の 二、第三号(明治二十一年十月一日、 かもしれない。本篇は の教育家ジョホノットの著書の翻訳)が最も早いものの一つ だと るという説)を紹介したのは、 筆名は天心子とある(目次には岡倉覚三と本名が記されている)。 に欧米の美育論(教育は知育、 ったものである。 左 本篇における岡倉の美育の提唱もこの書と何らかの関係がある にも収録されておらず、また、これまで一般には知られていな 0 『新教育論』 篇は岡倉覚三が東京美術学校開校直前に『教 (明治十八年。 岡倉および日本近代美術教育史の研究資料とし 『岡倉天心全集』(昭和五十四~五十六年。 金子一夫氏のご教示によれば、 徳育、 普及舎。 ここに紹介する 同年十一月一日)に寄稿したもので、 体育、 高嶺の友人であるニュー 美育をもって完全なものとな 育 評 高嶺 わが国 論 平凡 1 1 5 7 秀 第

○美育ニ關スル注意 天心子

樂ヲ寄セ、 率天上ニ遊ハシメ、荊刺林中ヲ披テ、第二義ニ墮ルノ憾ナキニ非サルナリ、 秀麗 美術 ノ神韻 ノ別天地ナリ、 氣筆先ニ ハ之ヲ論セザルヲ以テ善シトセン敷、 動テハ、 意言外ニ溢レテ 寸鎌尺幅モ水雲萬里ノ杳茫ヲ顯ス、 下界ノ風塵ニ任 路ノ花影ヲ踏ムハ、 剩章殘句モ人生千古 口 シテ、 ヲ 開 ケ 是則高 魂ヲ兜 ハ忽 哀 有